

放送 & 芸能

名曲に旅情乗せ

鉄道にまつわる音をクラシックに織り交ぜる。そんなユニークな演奏活動をピアノとバイオリンの二人組「スギテツ」が続けている。古今の名曲に旅情漂うアレンジを施し、新幹線の車両に必要な板金技術が生んだ金属製バイオリンも奏でたり、鉄道愛好家ならではのセンスを發揮している。超特急からローカル線まで、各地に延びゆく音楽鉄道「スギテツ線」の旅はいかがが。

(藤浪繁雄)



鉄道博物館内で演奏する「スギテツ」の杉浦哲郎と岡田鉄平。さいたま市大宮区で

新アルバムの「目玉」企画に、新幹線の先頭部の曲線に不可欠な「打ち出し板金」という技術で作上げたアルミ合金製のバイオリンの演奏がある。チャイコフスキー「バイオリン協奏曲」をもとにした変奏曲「夢の超特急コンチェルト」を岡田が奏でた。

輝く銀色がまぶしいバイオリンは、新幹線の先頭部の曲線部を作り続ける山口県下松市の板金加工会社「山下工業所」が手掛けた。0系はじめ、東北新幹線「はやぶさ」のE5系、来春デビューの秋田新幹線E6系まで、20種類以上手掛けた新幹線の先頭部は、職人がハンマーで一つ一つ仕上げてきた。

世界に誇る新幹線技術の一端を担う山下竜登社長だが、「技術の認知度が低く、継承に不安を抱いた」。そこで、技術の最大の特徴である曲面づくりをアピールしようと、08年からアルミやマグネシウムでチェロやバイオリンを作り始めた。

鉄道博物館、「リニア・鉄道館」(名古屋市)などのコンサートで演奏してきた岡田は「木製より重いが、空

洞にするなどの改良でだいぶ軽くなった」と実感する。音色は木製よりも深く響き、残響も大きい。「安全な新幹線を作る技術に敬意を込めて演奏したい」と岡田。山下社長は「彼らの演奏で私たちの技術にも関心が集まれば」と期待する。

新幹線の技術ひかる楽器



0系新幹線の前で「音楽でローカル線の盛り上げにもつなげたい」と語る「スギテツ」の杉浦と金属製バイオリンを手にする岡田。名古屋市港区のリニア・鉄道館で(撮影・古池直之)

「会場は満員列車、まるで埼京線」
今月中旬、さいたま市の鉄道博物館内で、パーソナリティーを務めるFM・NACK5の「GRAND NACK

RAILROAD」(日曜午前6時)の収録を兼ね、新アルバム「SUGITETSU EXPRESS」の発売記念のコンサートを開いた。ピアノと編曲の杉浦哲郎とバイオリンの岡田鉄平は、会場の熱気を地元の路線に例えて笑いを誘った。

演奏したアルバム収録曲の中に、J・シュトラウス二世の「観光列車」をアレンジした変奏曲「汽笛の軌跡」がある。二人は「車両が楽器にな



った」と切り出し、東海道新幹線の初代車両「0系」、大井川鉄道(静岡県)、広島電鉄の路面電車などの警笛や汽笛、走行音をちりばめた陽気な曲を披露。二人が各地で録

音してきた「鉄道音」を生かした。
スギテツは名古屋市出身の杉浦と、福岡県出身の岡田が二〇〇四年に結成。モーツァルトも好んだという音楽のパロディー精神の波長が合った。杉浦が「常に新しいことができないか考えている」と言い、型にはまらない音楽を追求している。

アニメやドラマなどの曲にクラシックを組み合わせた。したが、特に好評なのが鉄道の音を絡めたスタイル。発車メロディー、踏切の音。少年時代から鉄道を愛する二人にとって素材のヒントは豊富だ。杉浦は「ニッチ(隙間)の分野だったが、鉄道ブームもあり市民権を得た」、岡田は「車やアニメと違い、鉄道に関わらない人は少ない」と実感する。マニア向けにならず親しみやすい楽曲を届ける姿勢は性別、年齢層を問わず、ファンを増やしている。

今もプライベートで各地の鉄道に乗り、未知の音を探して歩く。その積み重ねは北総鉄道(本社・千葉県鎌ヶ谷市)、養老鉄道(岐阜県大垣市)、愛知環状鉄道(愛知県岡崎市)など、各社からの依頼もあって手掛けたオリジナルのイメージ曲にも發揮され、アルバムに収められている。杉浦は「音楽家や芸人らプロも注目する音楽を」と語り、岡田は「クラシックの質を落とさず、こだわりの音を表現したい」と言う。路線の拡大はしばらく続きそうだ。